

愛媛県北条市に在来する地大根（三月大根）について

第2報 栽培の地域および歴史[※]

※※ 福山寿雄・加藤正弘・金田 泉・藤田政利

'Sangatsu-daikon', a Local Variety of Japanese Radish

Cultivated at Hojo City in Ehime Prefecture

2 Cultivation Area and Raising History

Toshio FUKUYAMA, Masahiro KATO, Izumi KANADA and Masatoshi FUJITA

I 緒 言

第1報⁹⁾においてその一部を報告したが、愛媛県の中予地区北条市には、かなり古くから、根身が赤紫色を呈し大型でシリンダータイプをした抽苔性の遅い在来の地大根がある。しかし、この地大根の栽培学的分類や栽培地域ならびにこれらの成立要因などについては、あまりよく知られていない。この地大根の形質からみて、おそらくは南九州地大根群に属するものと思われるが、当地方においては、特定の地域にのみ栽培が認められる。また、この大根は三月大根あるいは三月こう、庄大根などと呼ばれ、主に農家の庭先で僅かながら栽培されているにすぎない。

そこで本報では、これらの地大根が栽培されている地域ならびに栽培の歴史的背景などについて引き続き現地調査を行い、若干の知見を得たので報告する。

II 調 査 方 法

北条市のほぼ全域について現地調査を行った。特に主要地点と思われる40箇所（図-1）については、農家の古老による聞き取り調査を実施し、地大根の栽培状況やその歴史などについても検討を試みた。また地域ごとに農協の営農指導員や部落の区長などの協力を得て、地大根が栽培されていると思われる菜園をたずね、栽培状況や利用、保存、採種方法などを調査した。さらに愛媛県の主な種苗商などを対象に聞き取り調査を実施して、当地方における地大根の種類ならびに主要な大

※ 育種学会四国談話会第36回講演会で一部を発表

※※ 附属農場 (University Farm) ※※※ 育種学研究室 (Laboratory of Plant Breeding)

根種子の販売、仕入れ先などの調査を行った。その他に、北条市誌¹⁰⁾や伊豫国風早地誌¹⁾および愛媛県地名大辞典⁹⁾、日本歴史地名大系(愛媛県の地名)⁸⁾など文献による検討も行った。

Ⅲ 調 査 結 果

1. 栽培地域

三月大根が栽培されている地域は、愛媛県中予地区でも北条市に限られている。なかでも図-1に示す通り、北条市の立岩川を挟んでその北側の山麓部から下流域の平野部にかけて広がる旧難波村の庄を中心とした地域と、同河川の南側流域に位置する旧正岡村の八反地・椋原を中心とした地域が存在し、その他の地域での栽培は非常に僅かである。

(1) 庄を中心とした栽培地域

この地域は北条市で最も大きな河川である立岩川の北側に位置し、同河川の山麓中流域から順次庄→老僧→上難波→中通→下難波へとその集落は下流域に向って山麓部から平坦部をとりまくように連なっている。

現地調査による結果では、庄を中心に順次下流域に下るにしたがってその地大根の栽培は少なくなっている。またこの地域では、これらの地大根を「庄大根」と呼んでいる。

(2) 八反地・椋原を中心とした栽培地域

この地域は立岩川の南側に位置し、八反地・椋原を中心とした地域に地大根の栽培が集中している。特にこの地域では、八竹山、二神山などの山麓部の西斜面を有した花崗岩台地に椋原の集落があり、ここから北西部下流域の平野部にかけてゆるやかに下って行くといくつかの集落が散在する。これらの上流域から中西外上→八反地→中西内→中西外下、さらに下って行くと辻の集落へと扇状に広がっている。この地域における地大根の栽培は順次下流域に下るに従って少なくなる。またこの地域ではこれら地大根の呼び名を「三月こう」および「三月大根」などと呼んでいる。

(3) その他の栽培地域

前述した二つの地大根の主要な栽培地域の他には、ほとんど栽培は見られない。例えば両地に隣接する海岸部の大浜・土手内・新開などの各地区や立岩川中流域山麓部の高田・神田・波田などの地域でも、三月大根の栽培は見られない。さらに立岩川上流域にさかのぼり、才之原・猿川・小山田地区などの中山間地帯でも、その栽培は見られない。

一方、椋原地区に隣接してほぼ同じような地形を有し、地質条件も似ていると思われる萩尾地区でも、三月大根の栽培はみられなかった。また北条市の南部地域を流れる河野川や高山川などの流域には、その山麓部から平坦部にかけて椋原とほぼ同じような地形を有する地域があるが、三月大根はほとんど栽培されていない。しかしながら例外的に宮内・別府・横谷・米之野などの各地区に

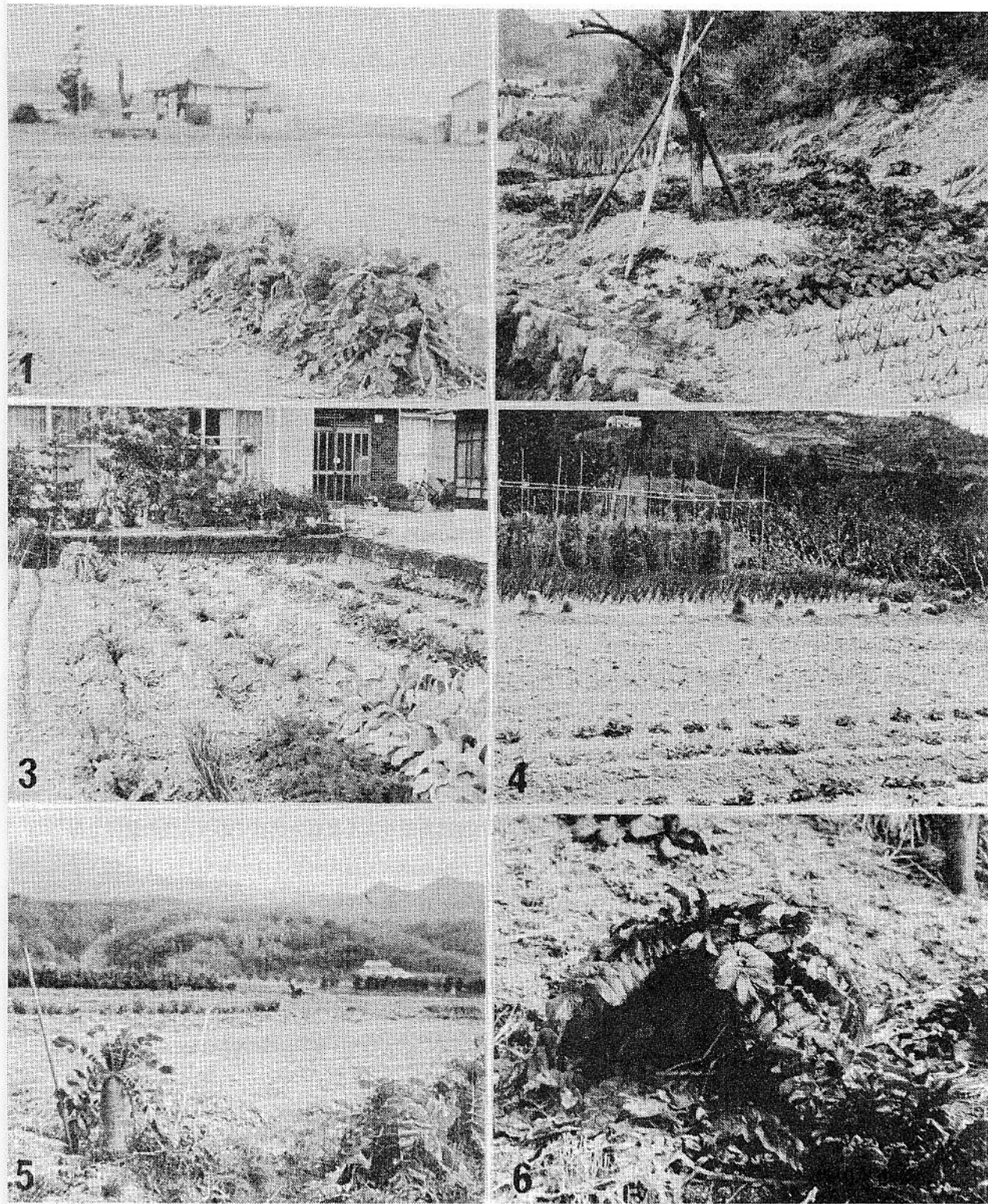


図-2 北条市における三月大根の栽培状況
1. 3. 5 庄地域, 2. 4. 6 八反地・棕原地域

においては、僅かながら過去においてその栽培の記録が認められた。しかもその栽培は特定の時期に限られ、またその面積は非常に小さいものであった。さらに河野川および高山川の中下流域にあたる善応寺・佐古・常保免・片山・夏目・苞木・中須賀・府中などの各地区や栗井川流域などにおいても、三月大根の栽培は全く認められなかった。

2 三月大根の栽培とその形態

現地調査の結果から、北条市における三月大根の形態には、前述の二つの主要な栽培地域において各々類似点ならびに相異点のあることが判明した。

(1) 庄を中心とした地域の地大根（庄大根）

この地域の地大根は 図-2 の 1 3 5 に示されるように、そのほとんどが平坦部の水田地帯に栽培されている。さらにその地大根の形態についてみると、その根身はやや細めのものが多く、葉身部はやわらかである。さらに葉身部未展開葉部分には紫紅色を呈しているものと、そうでないものがあり、立性～斜性のものが多く見られた（図-2 の 1）。根色は赤紫色の鮮明なもの、やや薄いものから白色のものまであり、非常に変異に富んでいる。

(2) 八反地・棕原を中心とした地域の地大根（三月こう・三月大根）

この地域の地大根は図-2 の 2 4 6 に示されるように、その多くは排水の良い花崗岩の風化土壌を母体とした台地の畑地帯に栽培されているものが多い。その形態的特徴は図-2 の 6 にみられるように葉身部は濃緑色を呈し、やや硬くその中心部の未展開葉の部分には、庄地域のものと同様に紫紅色の強いものと全然ないものがある。また根身は、三月大根特有の大型でシリンダータイプを有するものが多く、より鮮明な赤紫色を呈しているものが多いが、ここでも根色の変異はある。さらにこの地域の地大根の葉身部は赤紫色をした根部を覆うような形で伏性であり、庄地域のものが立性～斜性のものが多い点と異なっていた。また棕原地区では図-2 の 4 に見られるように、4 月の上旬を過ぎて桃の花が満開の時期になっても、これらの地大根は煮物、切干し、なますなどの食用に供されている。この地域の住民の話では、「地上部を切除しておけば大根のす入りが少なく、4 月の下旬頃まで充分おいしく食べられる」と言っている。

3 両地域における栽培の歴史

(1) 庄を中心とした庄大根

この地域の調査では 72 歳～83 歳の老人 9 名について聞き取り調査を行い、全員共通して「子供の頃から、この地域での庄大根の栽培をよく知っている」と言う結果を得た。またこの地域で現在老人クラブの会長をしている 73 歳の古老は、「明治 2 年生れの父親が庄大根を栽培して、朝市に出荷したことがある」と話し、別の 83 歳の古老も、「祖父の時代から栽培しているから、おそ

らくは今から200年くらい前からすでに庄大根はあったのではないかと話してくれた。さらに、この地域の83歳の老婦人は、「私はこの土地に生れ育ったが、自分の子供の頃から庄大根はあった」と農作業をしながら話を続けた。「この大根はおいしいからいつも作る。煮物はもちろんのこと、切干しにしたり、はりはりなど酢物にしても、とてもおいしいので毎年作るのが楽しみだ」と話してくれた。

(2) 八反地・棕原を中心とした三月こう・三月大根

すでにこの地域の歴史については、その一部を第1報⁹⁾で報告した。当地域の75歳の老人は、「古ばあさん(曾祖母)から三月大根の話を聞いており、今、古ばあさんが生きておれば152歳になるから、おそらく200年くらい前からこの地に三月大根は作られていたと思う」と話していた。また八反地の86歳になる古老の話では「自分が知っている地大根はかなり昔から作られているものと思うが詳しいことはわからない。この土地の地大根は3月～4月頃に抽苔するが抽苔してもなおす入りが少なく、緻密でやわらかく、煮炊物や酢物などに使えるので重宝である」と話してくれた。またこの地区では三月大根の呼び名を昔から三月こうと呼んでいる」と語っていた。

IV 調査結果の考察

1. 庄、八反地・棕原両栽培地域の成立および形態的変異

図-1の通り三月大根の栽培地域としては、庄を中心とする地域と八反地・棕原を中心とする地域が成立しており、両地域の三月大根の間には、形態的・生理的特性に類似点および相違点が認められる(図-2)。

この成立および特性の差異に関しては、以下のような要因が関与しているものと推定される。

(1) 行政区画の変遷および大氏神・氏子の関係

庄地域は古くは風早郡難波郷に属し、明治9年(1876)の大小区制の名称替えの時には第14小区に属している(図-3、図-4)。これに対して八反地・棕原は、古くは風早郡正岡郷でのちには第13小区に属しており、両地域は行政区を全く異にしている(図-3、図-4)。

それが郡区町村編成法公布後の明治18年(1885)の郡区町村制戸長役場の統合で、八反地に戸長役場を置き、庄、八反地・棕原の両地域は同一行政区に入っている(図-3、図-5)。この統合は明治22年(1889)の市町村制の施行までの5年間続いている。その後昭和26年(1951)の北条市の誕生まで両地域は別々の行政区に入り、庄は難波村に、八反地・棕原は正岡村に属していた(図-3、図-6)。

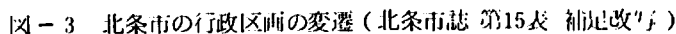
三月大根が北条に入ってきたのは今から100年～150年前の江戸末期から明治初期頃ではないかと思われることから、庄または八反地のどちらか、あるいはその両方に現在の三月大根の素材になる大根が入り、その地区に在来していた大根との間で互いに交雑が起こり、栽培と選抜がくり

明 9. 8 (1876)

明 11. 7 (1878)

明 18 1 (1885)

明 22 12 (1889)



返されてきたものと推定される。この間に両地区の統合があり、栽培がさらに広まったものと考えられる。この両地域の間の交流には、郷社（のちの県社）国津比古命神社が両地域の大氏神であったことも関係があると考えられる。また、その後行政区が別れ、両地域の間には三月大根の種子の交流はあまりないまま、それぞれ独自に栽培されてきたものと推定される。

(2) 両地域における栽培場所の時代的変遷

両地域はともに古い歴史を持ち、その集落の背後には山麓に文化遺跡があり、それぞれの地域で焼畑・開墾などによる発展の歴史をうかがうことができる。ことに庄地域の歴史は古く、その周辺地域での焼畑などによる開墾、開畑の歴史は現在の萩原・尾儀原・老僧などの地名からも容易に想像できる。

同様に八反地・棕原地域においても、年代は新しいと思われるものの、庄→老僧などの開墾・開畑の関係とはほぼ同じような発展過程を経てきているものと考えられる。

現在の庄地域における山麓部は、そのほとんどがみかん園や雑木林になっている。しかしあまり古くない昔には、ここに集落があったものと思われる。長い歴史の中で集落は僅かずつ移動し、現在のような平坦部の水田地帯に移動してきたものと考えられる。これに伴い地大根もまた水田地帯の住宅地のすぐそばで栽培されるようになったものと推定される。

これに対し八反地・棕原地域の地大根の栽培は、当地域における集落の発展の歴史⁵⁾とともに推移して来たものと思われる。特に二神山の西南斜面に位置する台地などでは、明治末期から大正初期にかけて開墾が行われている。⁷⁾したがってこの地域、特に棕原では、比較的新しい時代になって集落の急速な発展があり、開墾・開畑などによる耕地の拡大と共に、新しい排水のよい現在の畑地台地が生まれ、ここに地大根が定着して現在に至っているものと想像される。

(3) 両地域における地大根の呼びかたの違い

庄地域では「庄大根」、八反地では「三月こう」、棕原では「三月大根」とそれぞれの地域で呼びかたが決まっており、各地域では他の呼び方をほとんどしない。このことは各々の地域において、自分達の大根であるという意識が強く感じられる。またこれらの地域では、「他県等から種子の分譲依頼があっても、あまり地域外へは出したがらない」という話も聞く。

以上のことから考えると、各地域間では種子の交流もあまりなく、またその必要もなかったものと思われる。

(4) 両地域における採種時の選抜意識の違い

庄地域の聞き取り調査によると、「庄大根は他の大根よりおいしいから作る」という声が多く、一方、八反地・棕原地域では「抽苔性が遅く、抽苔してもなおす入りが少なく、長い期間食べられるので重宝だ」という結果を得た。これら両者の間ではその意識において幾分異なるものを感じた。すなわち庄地域では、抽苔性・す入り性などよりも食味にその主眼が置かれているように見えた。こ

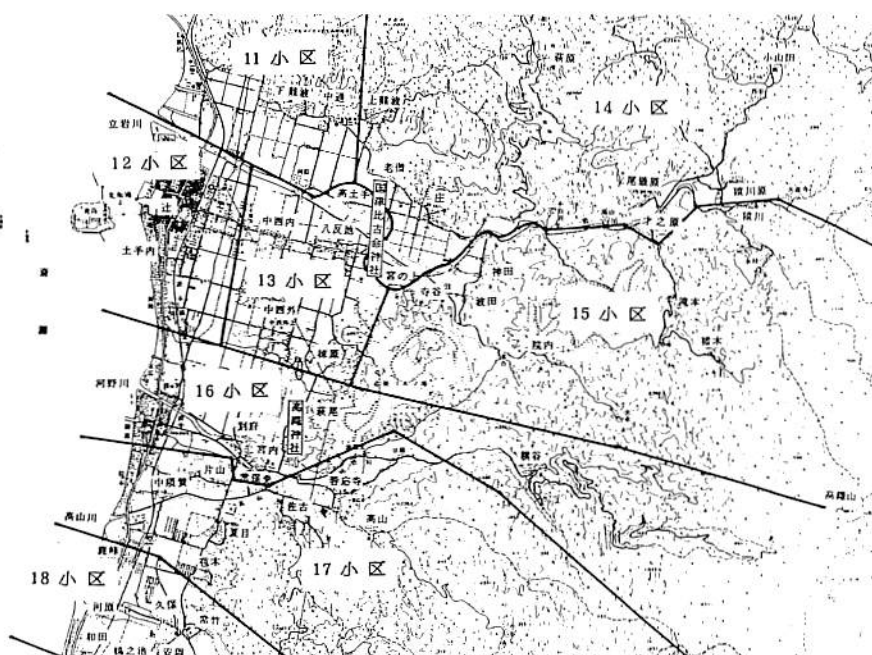


図-4 大小区制の名称替え（明治9年）後の行政区画

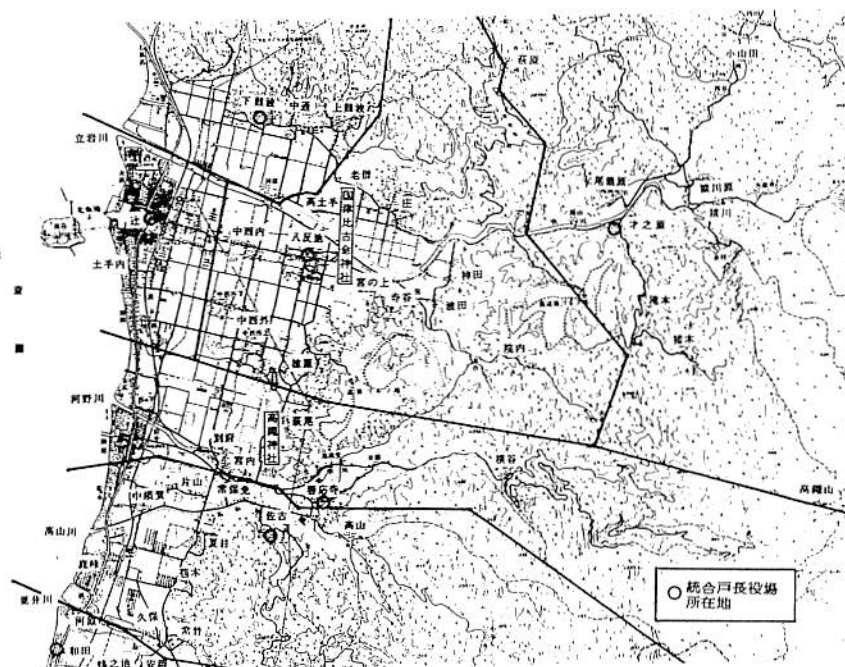


図-5 郡区村制戸長役場の統合（明治18年）後の行政区画

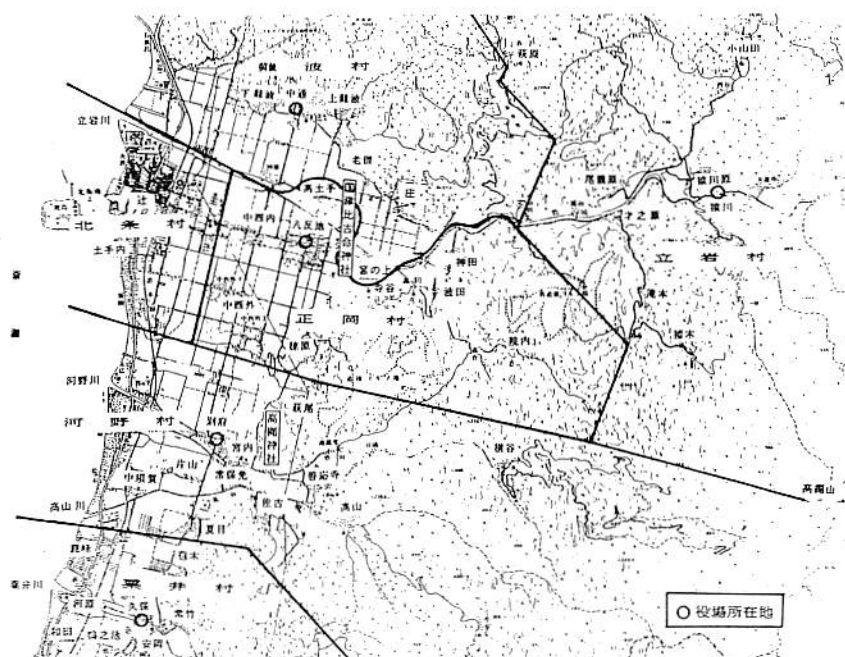


図-6 市町村制施行（明治22年）後の行政区画

れに対し八反地・棕原地域では抽苔性の遅いもの、す入り性などを考えて長期間食用に出来る形質の選抜にその重点が置かれているように思われた。このような意識の違いは、前述した両者の栽培場所による時代的変遷とも深くかかわりあっているものと考えられる。

(5) 採種方法の違い

以上のほかに、両地域では採種方法にも違いが認められた。すなわち庄地域では、図-2の5にみられるように、それぞれの農家が自分で最も良い形質を持っていると思われる大根ただ1本のみを早くから決めて残し、翌年の種子を採っている場合が多い。この場合その周辺には色々な別の大根が散在している風景もよく見られた。

一方、八反地・棕原地域の地大根の採種は、抽苔性に主眼が置れているためか、より多くの個体から抽苔性の早いものを順次取り除いて行き、その結果遅くまで複数の個体を同一場所に残して採種している場合が多くみられた。

以上の結果と大根が他殖性作物であることを考え合わせると、庄大根ではより幅の広い変異を保ちながら独自に発達しその特徴はよくあらわれているように思われた。八反地・棕原地域では採種の選抜意識がほぼ統一されており、その結果より変異幅の狭い形で現在の地大根が推移して来ているものと考えられる。

以上のようにこれら種々の要因が関与して両栽培地域が成立し、形質の類似点・相違点を併せ持

つ現在の三月大根が両地域に成立したものと考えられる。したがって両地域における三月大根の起原は同じものと思われる。

前述の主要な二つの地域以外のところでは、三月大根の栽培はほとんどみられない。主要な両地域に隣接する海岸部の大浜、土手内、新聞などでは、塩害や風害、また低湿地による湿害などの気象および土壌条件が主な原因で栽培されないものと考えられる。両地域を狭む立岩川の上流や北条市の南部地域を流れる河野川、高山川、粟井川などの上流域中山間部地帯でも、栽培はほとんどみられない。これは三月大根が南九州地大根群に属するものと考えられることから、これらの地域においては1月、2月の低温、寒風が制限要因となるものと考えられる。また椋原地区に隣接する萩尾地区や河野川、高山川流域における山麓部から平坦部にかけての各地区では、地形が椋原地区とよく似たところもあるが三月大根の栽培は認められなかった。これらは行政区画が昭和26年北条市の誕生までは全く異っていること(図-3, 4, 5, 6)、大氏神(郷社)が国津比古命神社(旧難波村、旧正岡村)、高縄神社(旧河野村)、宇佐八幡神社(旧粟井村)などそれぞれ異っていること、さらに土地条件などの違い等も関係しているものと推定される。

2. 庄、八反地・椋原両地域における栽培の歴史

庄の地域では農家の古老を対象に聞き取り調査を行った。幸いこの地域では、老人クラブの会長など当地域に栽培されている地大根について関心を持っている人達が多く、庄大根の栽培状況やその歴史について非常に詳しい話を聞かせてくれた。

庄における聞き取り調査の最も古い話では200年の歴史を持つことになる。また八反地・椋原地域の聞き取り調査からも200年にさかのぼる結果となり、両者の歴史は偶然にも一致した。

次に三月大根について、文献による検討を行った。三月大根の特性によく似た大根の記載として、「農業全書」¹⁾(1696)の餅大根、三月大根、伊吹葉、ねずみ大根、「和漢三才図絵」⁶⁾(1713)の三月大根、「菜譜」³⁾(1714)の三月大根、もち大根、伊吹大根、また「本草図譜」の「菜部」²⁾(1814)に、あか大根、むらさき大根、西瓜大根、紅あざみ大根、伊吹大根などがみられ、いずれの品種も成立は今から180～190年前と推定される。これら文献による年代と前述してきた庄、八反地・椋原両地域の地大根の200年くらいという歴史は、ほぼ一致する。しかし、現地聞き取り調査をより厳密に考えると、これらの地大根は今から100～150年くらい前に当地方にあらわれたものと推察される。

また、以上のほかに愛媛県の主要な種苗商にも出向いて聞き取り調査を実施した。その結果、比較的新しい時代の大正末期頃から終戦後の昭和25年頃の時期において2～3の種苗商では九州地方から種々の地大根の種子(例えば女山、桜島、練早四月、横川赤など)を導入していたことがわかった。これらは一部現在でも、「松山市和気、堀江地区などに残っているのではないか」と、種苗

商は話してくれた。またこれとは別に大洲市のある種苗商は「大正末期から昭和30年頃まで、温泉郡中島町などの各島嶼部に行商し、九州地方から仕入れた種子を販売していた」と語ってくれた。しかしこれらの話は、いずれも先に述べた北条市に在来する三月大根の成立とは年代の点から無関係であることが今回の調査で明らかになった。

V 摘 要

前報に引き続き、北条市に在来する地大根（三月大根）の栽培地域並びに栽培の歴史的背景などについて現地調査を行った。

(1) 三月大根が栽培されている地域は、愛媛県中予地区でも北条市に限られている。なかでも、北条市の立岩川を挟んでその北側の山麓部から下流域平野部にかけて広がる旧難波村の「庄」を中心とした地域と、同河川の南側流域に位置する旧正岡村の「八反地・棕原」を中心とした地域が存在し、その他の地域での栽培は非常に僅かである。

(2) 庄を中心とした地域の地大根は「庄大根」と呼ばれ、ほとんどが水田地帯に栽培されている。その地大根の葉身は未展開部が紫紅色を呈し、やわらかく、立性～斜性である。根身はやや細目で、赤紫色の鮮明なもの、やや薄いものから白色のものまであり非常に変異にとんでいる。

(3) 八反地・棕原を中心とした地域の地大根は「三月こう」とか「三月大根」とか呼ばれ、その多くは排水の良い花崗岩の台地の畑地帯に栽培されている。葉身部は濃緑色を呈し、やや硬く、未展開部は紫紅色である。根身は大型でシリンダータイプをした赤紫色のものが多く。また、葉身部は根身を覆うような伏性である。

(4) 聞き取り調査より、庄、八反地・棕原の両地域共に、「古くから栽培は行われており、200年くらいの歴史がある」という結果を得たが、検討の結果、その年代は100～150年くらいまでさかのぼることができる。

(5) 庄、八反地・棕原の両地域が主要栽培地域になり、かつ両地域の地大根に形態的差異が認められる。これは、両地域における i) 行政区の変遷、大氏神と氏子の関係、ii) 栽培場所の時代的変遷、iii) 地大根の呼び名の違い、iv) 採種方法の違い、v) 気象条件並びに土壌条件等の要因が関与しているものと推定される。

謝 辞

本研究を遂行するに当たり、現地聞き取り調査の際には田原三男技官の協力を得た。また北条市における行政区画の変遷（北条市誌 第15表 補足改訂）の検討の際には、前北条市企画課市誌編纂主任宮本且之氏に多大な御助言と御協力をいただいた。ここに感謝の意を表する。

また、文中の地図はすべて「国土地理院発行」2万5千分の1の地図を使用させていただいた。

引用文献

- 1) 伊豫国風早郡地誌編纂委員会(1876~1878) 伊豫国風早郡地誌。式~六。
- 2) 岩崎常正(1814) 本草図譜。菜部。
- 3) 貝原益軒(1714) 菜譜。
- 4) 角川日本地名大辞典編纂委員会(1981) 愛媛県地名大辞典 P.1166 角川書店。東京。
- 5) 篠原徹旨(1978) 八竹山由来記。「風早」創刊号:50-52。
- 6) 寺島良安(1713) 和漢三才図絵。
- 7) 得居 衛(1981) 一枚の絵地図「文政時代の八反地村」。「風早」第5号:54-61。
- 8) 日本歴史地名大系編集委員会(1980) 愛媛県の地名 P.765 平凡社。東京。
- 9) 福山寿雄・加藤正弘・金田 泉(1984) 愛媛県北条市に在来する地大根(三月大根)について。第1報 抽苔性, す入り性。愛媛大学農学部紀要 28(3):123-132。
- 10) 北条市誌編集委員会(1981) 北条市誌 P.1422。
- 11) 宮崎安定(1696) 農業全書。

Summary

Investigations were carried out to verify the historical background of the 'Sangatsu-daikon', a local variety of Japanese radish. It has been traditionally said to be native to Hojo city in Ehime prefecture.

1. The location where 'Sangatsu-daikon' is cultivated are confined to some areas of Hojo city. The radish has been grown on the fields along the 'Tateiwa' river.

The 'Sho' section of the old 'Namba mura' village covering the northern part of the river has been a center of the cultivation. The 'Hattanji Mukunohara' section of the old 'Masaoka mura' village developing along the south side of the river is another center. Other sections were almost scanty in the cultivation history (Fig. 1).

2. The radish native to the 'Sho' section has been named 'Sho-daikon' and grown in the paddy field. Colour of the young leaf is reddish purple and becomes green with the expansion. The leaf blade is soft and erect or plagiotropic. The root is slightly slender and the colour of the root varies widely from purplish red to white (Fig. 2).

3. The radish native to the 'Hattanji Mukunohara' section has been named 'Sangatsukou' or 'Sangatsu-daikon'. The names mean that the radish is eatable even in March. The radish has been planted on the upland field with the soil originated from granite. Therefore, the soil generally drains well. The young leaf is reddish purple. Most roots are wide and long with cylindrical form and purplish red (Fig. 2).

4. From the investigation at 'Sho' and 'Hattanji Mukunohara' as well as literature study, it is supposed that the radish has been cultivated since old times, at least for 100-150 years.

5. Morphological comparisons between the radishes of 'Sho' and 'Hattanji Mukunohara' sections showed a little difference as well as the resemblance. It may be postulated that differences of the social backgrounds and agricultural conditions such as the requirement for the radish quality, method of home seed-raising, micro climate and soil properties contributed to the morphological differentiation of the radish.